

普遍と多様のはざま

(株)生命誌研究館取締役館長

岡 田 節 人

(元岡崎国立共同研究機構長)
(元基礎生物学研究所長)

1984年の10月（もう12年半になるなんて信じ難い）に基礎生物学研究所所長に就任し、この研究所の代表として世に接するようになった。すると基礎生物学とは何ですか、としょっちゅう尋ねられるのであった。改めてもののしく聞き質すまでもなく、感覚的に十分に正体がうかがわれる名称だと思ふのだが、日本のインテリ方は身構えて「…とは」と問うのがお好きだ。これでは尋ねる方も答える方も、かえってのっぴきがつかなくなって、折角の学問の魅力を失わせるのではないかと危惧しているのが本心だ。もっとも現在の私の仕事の場所である「生命誌研究館」ともなれば、何たるものか、という質問はもっとしばしばだが、ここには基礎生物学研究所とは何か、という問いとは異なった好奇心があるやにうかがわれる。

基礎生物学という言葉のうち、人がえらく難しく考えるのは基礎という二文字である。基礎は応用と対比して付けられたはずだから、この研究所が応用開発を使命として、献身しなくてもよい、という有難いお墨付きになっている。生物についての科学で、応用というたとふん、医学や農学であろうが、これは誰知らぬものとなない学問分野となってしまうので、応用生物学と呼ばれることはない。いわば基礎生物学は対比すべき応用生物学がないのだから、これはややこしい。

私が所長時代の初期の苦しまぎれに基礎の意味を、生物のすべての種に共通なつまり基本的なメカニズムを取り上げて研究する、ということにして質問をかわしていた。この立場は20世紀後半の生物の科学を象徴するものである。「大腸菌で真なところは、象でも真」というモノーの言葉は断固として真である。現在では *Drosophila* を調べるのはヒトを理解する早道、という表現もあろう。ここで見るいわば生物の普遍性を追求する態度は、科学の王道であることに変わりはない。にも拘らず、年々生物のもつ多様への関心がいや増す傾向にあるのを、私は当時から感じていた。あれは1987年のことだったろうか。新しい研究施設の要求をまとめるに際して、二つの固定的な部門に加えて、第三に生物多様性についての研究部門をしのびこませた。これは海のものと山のものともわからぬ、莫大にして曖昧なテーマである。しかし、このテーマが近い将来に、生物学のメジャーな焦点になるだろうことは、所長の第六感と好みによることとして一つぐらい勝手を許してくれ、といったものだ。但し、遠慮気味に客員部門としてであった。

それが、以後10年も経たぬ間に、多様性研究を名乗る部門は固定となり、しかも二部門ある。すごい成長だ。私は、現今および近未来の生物学の状況を「普遍と多様のはざま」と称している。前者は王道である。ところで後者の序曲は基生研の、短いながらもユニークな伝統として存在している。世

の中のあちこちに生命研究、と冠した研究・教育の場は雨後の竹の子の如くに、次から次へと出現する。しかし、生物と冠するものは殆どない、という状況である。生命というときは、もちろん普遍の研究をいう。この普遍的生命研究の場のみの増強は、私見をいうならば、多少時代おくれの感がある。何故なら21世紀の生命・生物研究は「普遍（だけでなく）と多様のはざま」にあることが強く意識されねばならないから。かくして基礎生物学研究所の役割はいや増しているのである。